

---

# DORAGON

輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

DORAGON

### 【コード】

N6377J

### 【作者名】

輝

### 【あらすじ】

魔導師ロストが親父を倒すために旅をする。

# 1 魔導師

街の真ん中で騒ぎが起きている。町の人が言った。

「魔導師同士のけんかだつてさ。あつ、魔導政が来たぞ」

魔導師とは魔法を使う者のことだ。昔の魔導師は普通の人間として扱われていたが、徐々に人を傷つける魔導師が出てきたことにより魔導師の排除活動が行われた。それにより一時期はすべての魔導師がいなくなつたが、約50年前にバクスと言う男のチームが現れたことにより魔導師が増えた。その魔導師達を捕まえるために政府が発表したのが魔導政だ。魔導政は魔法の力を使うことが許され、魔導政は世界に配置された。

「兄ちゃんよ、俺は首に500万かかっているおたずねもんだ。そんな俺に肩ぶつけといて許してくださいで済むと思うなよ。」

「誰が許してくれっていった？」

「ふざけやがって」

男は手に魔力を溜めた。

「おい500万、俺の名はロスト。」

男は魔力を投げたロストの右手が火に包まれた。「火拳」で突き破って男を吹き飛ばした。

「よわっ」

1 魔導師（後書き）

すごい力を見せたロスト、次の街に待つのは！

## 2 用心棒

あの街を出てから3日が過ぎた。ロストは次の街に向っていた。だが、前の街以来ロストには、女が着いて来ている。

「何でお前俺について来るの？」

女は笑顔で答えた。

「お構いなく。」

「いやいや、理由はいえよ。」

「私、小さい頃に両親を殺されたの。」

「だれに？」

「魔導師。けどもう私の力だけじゃ前に進めない。私を連れていって。」

ロストは彼女の気持ちがいほどわかった。

「悔しい気持ちはわかった。けど、そいつに会うまでずっとおれにたよるつもりか？俺にたよりつずけていて、お前の両親を殺したやつを倒せるのか？」

「そ、それは・・・」

ロストは歩き出した。

「だったら、そいつに会うまでに倒せるように修行しろ。わかったら行くぞ。」

「え、うん。」

「俺ロスト。」

「私はリサ。」

ロストの優しさがこれからの旅には必要だな、と思ったりした。

「ねえねえ、これってどこ向ってるの？」

「ドンベルト。」

「ドンベルトって鉄壁街のあのドンベルト！」

「ああ、ドンベルトに強い奴がいるらしいからそいつを仲間にする。」

ドンベルトとは、自分の街以外の者がやってくると強い用心棒が片っ端からやつつけてしまう事で鉄壁の街という呼び名がついた街だ。

「ねえ、やめた方がいいと思うよ。だってさ、街に入るのも困難なのにその街の人を仲間にするなんて。」

「いいから、ほらあれだろ」

2人は門の前で立ち止まった。すると、門の上から男が顔を出した。

「旅のものか、帰れ。」

「クロードと言うものに用がある、会わせてくれ。」

「だめに決まって・・・」  
門が開いた。

そして中から男が出てきた。

「そういうな門番、わざわざ用心棒に会いたいって言うてくれるんだ。歓迎しようじゃねえか。」

「お前がクロードか。用心棒とはな。率直に言う俺の仲間になつてくれ。」

「失笑。」

クロードは走って来た。

「望むところだ。」

## 2 用心棒（後書き）

ドンベルトの用心棒その力は？

### 3 落雷

クロードは手を前に出した。「雷鳥」で、クロードの手からは雷で出来た鳥がすごいスピードでロストを襲う。ロストは口から火を出した、「炎放射」炎は雷鳥を焼き尽した。クロードは手を前に出した。

「まだまだ。」

クロードの手から細い雷がロストに向かって伸びていった。雷はロストの肩を擦れていった。だがロストはすかさず「炎槍」で火の槍をクロードに投げた。クロードに槍が刺さった。しかし、槍は通り抜けてクロードは雷になった。

「雷分身だ。アンタやる方だが、大振りで大ダメージを与えるアంతとスピード系の技を次々当てる俺じゃ分が悪い。おとなしく帰ったらどうだ？」

「悪いな、俺は頭が悪くてな、目の前の敵を倒すことしか考えられないんだよ。」

「フン、おもしろいじゃねえか。」

今度はロストが先に仕掛けた。「炎放射」で炎がクロードを包んだ。「雷光」で雷がクロードの体から溢れた。炎は雷にかき消された。

「いい技ばつか使いやがって。」

「地雷」をクロードが使った。

「今、地面に地雷をしこまさしてもらった。下手に動けば大ダメージだ。」

「うざってー。」

ロストはクロードに向かって走り出した。「火拳」でロストの手は炎に包まれた。ロストはクロードを殴った。クロードは吹き飛んだ。

「運の良い奴め、地雷にたまたま当たらないとは！」



「かもな、昔から運がいいからな。」

「次で蹴りをつけるぞ。」

空が曇ってきた。クロードは「電線」で雲と自分の手をつなげた。ロストの足元が割れてきた。

「いくぞ、クロード死ねー」

「死ぬのはお前だ。」

クロードは手を勢いよく下ろした。「落雷」雲から雷が落ちてきた。ロストは手を突き上げた。「火竜」地面から火の竜が出てきた。雷と竜はぶつかりあう。雷が遅れて鳴った。煙が立った。煙の中には1人だけが立っている。リサは思わず口を開いた。

「ロストだよね？」

煙のなかに立っていたのは・・・

### 3 落雷（後書き）

激闘と未勝利をつかんだのは！  
そして、クロードと街の人行方は！

## 4 街の秘密

煙が引いた。ロストが立っている。

「クロード、お前の負けだ。俺の仲間になれ。」

「確かに戦いには負けたが俺はこの街を守らないといけない義務がある。」

「義務？」

「そう、何も最初からこの街は鉄壁の街じゃない。」

12年前・・・

「街には活気が溢れていて街を訪れるものには最高のもてなしをしていた。だがある日、街にある2人組みの男がやってきた。街では男たちをもてなした。だがその男達は街の者を次々と殺していった、それを怒った街のものは男たちに戦いを挑み死んでいった。俺の親は街で一番強いという理由で挑まされた。まだ3歳の俺を置いてな、俺の両親は男達を自らの命を無駄にして封印術を使い男達を封印した。それから街に来るもの追い出すことがドンベルトの掟となった。そして、用心棒に選ばれたのが俺だ。」

「わかっただろ、俺にはこの街を守らないといけない義務がある。」

「ちよつと待った！」

街の置くから爺さんが歩いてきた。

「村長！」

「クロード、お前はこの街を今までしっかり守ってくれた。そろ

そろ自分のため生きたらどうだ？」

「俺がこの街からいなくなったら誰がこの街を守るんだ！」

「お前さんの姿で街のものは充分勇気をもたらった。」

「でも。」

街の中からたくさんの人が出てきた。

「行けよ、クロード。」

「クロード兄ちゃん。」

ロストはクロードに言った。

「いい街だな。」

「ああ、俺の自慢の故郷だ。」

「どうすんだ？最後に決めるのはお前だぞ。」

「しょうがねえな、お前の義務を手伝ってやるよ。」

「生意気が・・・」

「世話になつたな、みんな」

「こっちのセリフだ！」

「ほんとにいい街だな。」

「ホントだね。」

## 5 魔導刃の一人

3人はドンベルトから出て次の街に向かっていた。

「ねえ、これどこに向かっているの？」

「駄駄こねる位なら帰れば。」

「モーレディーに優しくないなクロードは。」

「WORLD ENDっていったいどこにあるんだよ？」

リサとクロードは声を合わせてロストに言った。

「知らないのか！」

リサは自慢気に言った。

「この世界はまっすぐ伸びていて、その果てにあるのがWORLD END。星の数ほどの魔導師が夢見て旅だつていく。しかし、そこに辿り着いた者は未だいない。そして世界は3つの区域に分かれていて私達がいる最も安全な区域イルーヌ、次がソルティア、そしてこの世界で最も危険な区域ギアンティス。」

「だけどロストの親父はどこにいるのかわかんないんだろ。」

「ああ、だがきつとギアンティスにいる。」

「そんなにすごいやつなのか？」

「ああ。」

「なまえは？」

「レイン。」

2人の顔が青ざめた。

「レインって炎轟のレインか？」

「そうだけど。」

「レインって言ったらギアンティアのなかでも強い魔導師に与えられる称号魔導刃の一人でしょ。めちゃくちゃ強いじゃん。」

「だけど勝つんだよ。」

木の上から声がした。

「お前じゃ無理だよ。」

ロストは振り返った。  
「ああ、兄貴！」

## 6 DORAGON

「この人がロストの兄貴か！」  
クロードはだいぶ驚いている。

「ああ、マストつつうんだ、弟が世話になってるな。俺はハイロ  
ート団の副リーダーやってるんだ。おめえらの魔導団の名前は？」  
クロードとリサは顔をしかめた。

「ねえ、ロスト、そういえばうちのチーム名は？」

「忘れてた、決まってねえ！」

「はっはっはっはっは、変わらねえなロスト。」

「決めた、俺らのチーム名は……」

「ドラゴンだ！」

「はっはっはっはっは。」

「兄貴笑うなよ。」

「けど確かにネーミングセンスねーな。」

「お前らまで。」

「まあいいじゃねえか、そのチームで世界を取れば。」

「ロスト、親父は俺が倒す。」

「いや、俺が倒す。」

「勝負だな。また会おうぜ、ドラゴン。」

マストは消えた。

## 7 セクライト団

あれから何週間か過ぎてドラゴンは次の街についていた。

「ねえ、ロスト。」

「なんだ？」

「この街になんかあんの？」

「わかんねえ。」

人の姿がない街にリサは不安を抱いていた。クロードも少しおかしく思っている。

「街に入って1キロは歩いたが人の気配がしねえ、臭うな。」

ロストは2キロぐらい先にある建物を指差した。

「あそこに大きな魔力を感じる。」

クロードは驚いてロストに言った。

「あんな先の魔力を感じ取れんのか！」

リサが言った。

「大きな魔力は3つ、小さな魔力は20位かな。そこに一般人もいるみたい。」

ロストとクロードは啞然とした。

「リ、リサ、お前・・・」

「言わなかったっけ、私感知タイプなんだ。」

「言つてねえよ、つーか言えよ。」

裏の木からナイフが飛んできた。「雷鳥」とナイフがぶつかりナイフは飛んでいった。

「気がつかなかった。魔力を消してた。」

「出て来いよ。」

草の中からマスクをかぶった男が出てきた。

「何者だ？」

「セクライト団の幹部、ナヌク。」

ロストが聞いた。



「セクライト団？」

「街を乗っ取る魔導団だ。下はたいしたことないらしいがトップのシドはかなりの強者らしい。」

「街の人がいないのはこのせいでいいみたいね。」

「どうするんだ？ロスト。」

「困ってそうだしな、助けてやるか。」

「てめえらはここで死ぬんだよ。」

「火脚」でロストの足が炎に包まれた。ロストはナヌクの顔をけって吹き飛ばした。

「やるならやるぞー！ー。」

「楽しくなってきた。」

「もう、勝手だよな、2人とも。」

「街を救うぜ大作戦だ！」

## 8 リサの思い

3人は一般人を助けることを優先に動いていた。しかし、セクライト団は3人のことに気がついてもう動き出していた。だがリサは気がついていない。

「もうばれちゃったみたい。ザコが動き出してるよ。」  
ロストは冷静に判断した。

「ザコなら問題ない、引き続き幹部と一般人の動きを探ってる。クロードと俺はリサをカバーしながらザコを倒す。」

「OK。」

2人はザコをどどん倒していった。

「着いたよ。」

いつの間にか一般人のいる牢屋にたどり着いていた。

「皆さん、大丈夫ですか？」

牢屋の中の人がいった。

「君たちは？」

「魔導団です。あなたたちを助けに来ました。少し下がっててください、ロストお願い。」

「ああ。」

「火拳」で牢屋を壊した。

「ありがとう。」

リサの裾を小さな男の子がつかんだ。

「もう大丈夫だよ。」

男の子はリサをたたき出した。街の人はそれを止めた。男の子は大声でリサたちに怒鳴った。

「なんで、もっと早く来てくれなかったんだよ。もっと早く来てくれたらパパとママは……」

「バカな事を言うんじゃない、すみません。この子の親は3日前に殺されてしまったんです。」

「許せない、こんなに小さい子の親を殺して、ボウヤ絶対私たちがやつつけてくるからね、約束だよ。」

「リサも親を殺された。だから、あの子の気持ちが痛いほどわかるんだ。」

建物の奥のほうから声がした。

「あーあ、みんな逃がしちゃって。」

女が現れた。

「そいつが僕のパパとママを殺したんだ。」

「だから何？」

リサが前に出た。

「2人とも行って、こいつは私が倒す。」

「何言ってるんだ！」

「クロード、リサに任せよう。」

「で、でも……」

「いいから行くぞ。」

「ありがとう。」

## 9 俺たちのリーダー

「私の名前はレイミー、幹部の一人よ。」

「私はリサ、それ以上はあなたに言う価値もないわ。」

「言ってくれるわね。」

レイミーは走り出した。レイミーはリサに針を投げた。リサは避けた。レイミーは次々と針を投げってくる。しかし、リサはそれを全て避けた。リサは落ちた針をとってレイミーに投げた。針はレイミーの頬をかすった。リサは内ポケットからナイフを出した。

「危ないもの持つてるわね。」

「針に言われたくないよ。」

リサはナイフでレイミーに斬りかかる。レイミーは避けようとするが避けようとする方向にリサは方向を変えた。ナイフはレイミーの足に刺さった。

「もう動けないでしょ？」

「くっ。」

「あなた達のやったことは許されることじゃない。あの子の気持ちを考えるっていつてもきつと考えられないでしょ。だから私はあなたたちを許さない。」

ナイフでレイミーを斬った。

その頃2人はシドのいる階の1つ下の階にいた。

「この上だな。」

「ああ。」

「待つてもらおうか。」

階段から男が降りてきた。

「俺はシドの右手、餓槍のタクト200万だ。」

「ロストは上に行け、こいつは俺がやる。」

「悪いな。」

「誰が行かすか！」

タクトは「飴玉」で飴の玉をロストに投げた。そこに、クロードが「発光」で光の壁を作って防いだ。

「悪いな、お前の相手は俺だ。」

「シドとは戦わない方がいいのに……」

「大丈夫さ、ロストは絶対に勝つからな。」

「どこからその自身はくるんだ？」

「ロストは俺らのリーダー、それだけだ。」

「甘いんだよ。」

「飴道」でクロードの周りは飴に包まれた。クロードは気にしず  
に走り出した。しかし飴を踏むとクロードの動きは止まった。

「かかったな。その飴は触ると当分動けなくなるぐらい固まって  
しまう。」

クロードは「雷光」で足元の飴を吹き飛ばした。そして、「雷刀」  
でクロードの右手に雷の刀が出来た。クロードは雷刀をタクトに向  
けた。雷刀はタクトに向かって伸びた。「飴壁」で飴の盾をつくり  
防いだ。

「雷刀は伸ばすのも縮めるのも自由自在。」

「想像以上にやるな。」

「雷鳥」で雷鳥がタクトに飛んでいった。「飴玉」と「雷鳥」は  
相殺した。

「決着つけようぜ。」

「いいぜ。」

タクトは両手を上に上げた。「大飴玉」で大きな飴の玉が出来た。  
クロードは「電線」で空と手を繋げた。タクトは大飴玉を投げた。  
クロードも「落雷」で雷を落とした。雷は飴ごとタクトを貫いた。

「くつ。」

「後は任せたぞ、ロスト。」



「お前が侵入者か？」

「ああ、ロストだ。お前がシドだろ何でこんなことするんだよ？」

「お前と私の価値観は違う分かなり合えないよ。」

「そりゃそうだ。じゃ、始めるか。」

「炎火放射」でロストは火を吐いた。シドはハリネズミのように変化して長いつめで炎をかき消した。

「何だお前？」

「知らないのか！お前のように自分から技を作り出す者を創造種といい、私のように動物などに姿を変える者を変動種という。」

「ふん、他にもいるのか？」

「ああ、まだいくつがあるらしいな。」

シドは「針千本」で体についた針をロストに飛ばした。ロストは「火柱」でロストを中心に火柱が天高く立った。針は火に当たってはじかれた。「火脚」火に包まれた足でシドを蹴った。

「痛ってー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「俺の強度は鉄以上だ。」

ロストは次々と攻撃を繰り返した。しかし、シドはビクともしない。「針団子」で体を丸めて突っ込んできた。シドの体には針がついている。ロストは逃げ出した。

「その程度じゃ逃げ切れんぞ。」

もうすぐ後ろにシドがいる。

「やるしかねえな。」

「火竜」でシドの足元から龍が出てきた。シドは吹き飛んだ。

「効いたよ。いい技持つてるじゃないか。だがその大技を連発すればお前の魔力は尽きる。」

「尽きるまでには倒す、こっちはまだ取って置きがあるんだ。」

「楽しみだな。」

「火槍」で火の槍がシドを襲った。「針団子」で防いでまたロストに向かってきた。

「決めてやるよ。」

ロストの右手に火の球体が集まりだした。

「それが奥の手か？火竜の100倍は小さいな。」

「確かに攻撃範囲は火竜に劣るが威力は火竜の100倍だ。」

「紅蓮弾」で掌の火をシドにぶつけた。シドは吹き飛んだ。

「俺の勝ちだ。」

クロードとリサが階段から上がってきた。

「やったみたいだな。」

「オメえらもな。」

「当たり前じゃん。」

「街の人に早く伝えてやるうぜ。」

その日の夜、街では宴が行われた。主役はもちろんロスト達だ。みんな笑ってる。

次の日、ドラゴンは街の者に見送られ次の街に行こうとしていた。すると、昨日の少年がリサの手をつかんだ。少年は下を向いて言った。

「ありがとう。」

リサはにっこりと笑って

「どういたしまして」

と言った。



街を出て1ヶ月、食料は底を尽き次の街も後どれだけ歩けばいいのかわからない。

「ここどこー？次の街まで後どん位？」

「ロスト、同じこと何回も言わないでよ。」

「お前らの目は節穴か？前。」

ロストたちの前にうつすら建物が見える。

「いつくぞーー。」

3人は走り出した。2時間後街に入れた。

「ここはなんて街だ？」

「わかんない。あんなにあっさり入れるなんて。」

クロードが前の都市部を指差した。

「ここは確か大草原パラシアじゃないか！」

「何で知ってたんだよ？」

「昔、本で読んだんだ。草原が広がっている発展都市だ。」

「うそでしょ。」

リサがひざをついた。

「どうしたんだよ？」

「パラシアはここ最近世界中で話題になっている。ソルティアから帰ってきた魔道団、ジョリック団がパラシアに攻撃してきたの。」

その攻撃にパラシアが反撃したら、ジョリック団は兵士200人を連れてパラシアに攻めてきた。そこから戦争が始まってしまったのだからこの街には今、魔導政の大佐クラスがいるし、ジョリック団もうろついている。そしてジョリック団裏には魔導刃の一人がいる。

何でこんなときに着ちゃったの。」

ロストが笑いながら答えた。

「何悲しがってたんだよ。ラッキーじゃねえか。ドラゴンが世界に知れ渡るチャンスだ、倒すぜジョリック団。」

「ホントだぜ。けどまず飯だ。」

リサは呆れ顔をした。

「死んだら怨むからね。」

ロストが言った。

「俺の仲間は死なせねえよ。で、リサまずどうすねばいい?」

「国を味方につけましょ。」

「じゃあ、王に会うか。」

「うっし、やるか。」

## 12 敗北

3人は王宮の前に着いた。そして王宮の前の兵士に話しかけた。

「俺ら、ジヨリック団と戦いてえんだけど・・・」

「それはホントですか！どうぞ王宮に。」

屋根から声がした。

「ちよつと待てよ。」

屋根から鎧を着た兵士が降りてきた。

「俺は兵士長のバルス。お前から3人で我らの仲間になって役立つとは思えない。俺と戦っていい成績が残せたら仲間にしてやる。リーダーは出て来い。」

ロストが前に出ようとした、しかしクロードが止めて前に出た。

「確かに一理あるな。が、お前相手にリーダーはいらねえ俺が相手だ。」

「バカ野郎、俺指名だぜ。」

「最近、強い奴と戦ってねえんだ。やらしてくれ。」

「つつ、取られちまったぜ。」

「ずいぶんと余裕だな。それでも500人の兵士長だ。甘く見ないでほしい。」

「そりゃ失礼。じゃ、行くぜ。」

「雷鳥」で雷鳥がバルスに飛んでいった。雷鳥はバルスの体にぶつかって消えた。

「この鎧は魔力をかき消す。」

「ちつ、魔力をもつと込めるしかねえな。」

「雷刀」で雷の刀が出来た。雷刀でバルスを斬りつける、しかし、バルスの鎧には歯が立たない。「地雷」でバルスの足元に地雷を仕込んだ。しかしバルスは地雷を避けながらクロードに突っ込んでくる。バルスは背中 of 槍を抜いた。クロードは雷刀を伸ばして攻撃するが槍に全ていなされてしまう。「電線」、「落雷」でバル

スに雷を落とした。バルスは「鉄層」で自分の上に鉄の盾を作って防いだ。

「クロード、お前の負けだ。」

ロストが言った。クロードの裏にはバルスが立っていた。バルスは盾で自分の姿を見えなくして、クロードの後ろに移動していた。

「いつの間に。」

バルスは言った。

「お前らに力があることはわかった。いいだろう仲間になれ。」

「やったじゃん。」

リサとロストは喜んでいた。しかし、クロードの顔に笑顔はなかった。

### 13 修行

3人は王の間に案内された。

「そなた達が戦うことを申し出た魔導団じゃな。国の代表として感謝する。そしてこの国を助けてくれ。」

王は深々と頭を下げた。バルスが言った。

「国王、王が人に頭を下げるなど……」  
王は怒鳴った。

「バルスは黙っておれ、この国を守れずに何が王だ。この国を守るためならわしは死んでもかまわん。もう打つ手はうった、しかしこの有様、希望はそなた達だけじゃ。」

ロストは自信満々に言った。

「安心しな、じいちゃん。俺らがこの国の英雄になってやるよ。じいちゃんは半身浴でもしてな。」

「ありがとう。」

「そうと決まれば突っ込もうよ。」

「待て。」

クロードが2人を止めた。

「まだだ、まだ俺らにそんな力はねえ。」

「クロード、何言ってるの！だいじょぶだって。」

ロストが言った。

「何だクロード、さっき負けたことまだ引きずってるのかよ。」

「そうじゃねえだろ、この国の命運は俺達にかかってんだよ、俺らが負けたら今この国にある命、そしてこれから灯され続けてく命が消える。そういう……」

ロストが言った。

「だからなんだよ。勝つ自身がねえんだろ、結局。だったら強くなればいいんだよ。修行だー！」

リサは笑った。

「まったくクロードは心配性なんだから。」

「うるせいよ・・・ホント。」

「じいちゃん、こんな大きい城だ修行用の部屋ねえかな？」

「おおあるとも、バルス案内してやってくれ。」

「それとまだ頼みがある。バルスは俺らと一緒に修行させてくれ、修行の期間は3日、最後に城の兵士は全員ジョリック団の下の奴と戦う。幹部は俺ら4人で倒す、いいか？」

「おお、わかった。」

ロストは何だかんだでいろんなことを考えていた。人を従える王まで従えていた。ロストには素質があつた、リーダーとしての・・・

こうしてロストたちの修行は始まった。ロストは3人に組み手を  
するように言って、自分は個室で修行していた。ロストは部屋の1  
番高い岩に登って魔力を引き出していた。

「俺も今のままじゃ勝てない。やっぱりあの技を使えるようにな  
らなきゃいけない。」

ロストは魔力を極限まで引き出していた。

その頃3人はリサとバルスが組んでクロードと戦っていた。これ  
はロストの命令だった。そうしている内に2日が過ぎた。ロストが  
部屋で修行していると兵士が走ってきた。

「大変です。ジョリック団の幹部が・・・」

ロストはジョリック団の幹部がいる王宮の屋上に向かった。

「お前が国が雇った魔導団か。おいらはデヤス、幹部だ。」

「てめえがザコか。」

10分位してからリサ達が来た。そこにはロストが立っていてデ  
ヤスが倒れていた。

「えっ、ロスト倒しちゃったの？」

「ああ、10秒持たなかったぜ。」

「一体どんな修行したんだ？」

「普通の修行さ。明日、ジョリック団を落とそう。」

その夜、ロスト達は組み手をした。ロストVSリサ、クロード、  
バルスだ。しかしリサ達は歯が立たなかった。

「一体どんな修行したんだ？」

「昔、親父が教えてくれたんだ、だがあん時は使いこなせなかつ  
た、でも今なら使いこなせる。」

その日の夜、王宮の屋根にロストとバルスがいた。

「いよいよ明日だな。」

「何だあがつてんのか？」

「明日、この国のすべてが決まる。」

「大丈夫、俺らは勝つ。」

「励ましてくれてありがとうよ。」

「励ましたつもりはねえ。励ますなんて優しいこと俺にはできねえし、励ますぐらい自身がないなら最初から協力してねえよ。」

「で、でも・・・」

「なあ、バルス。」

「んっ？」

「パラシアが好きか？」

「ああ、好きだ。」

「そっか、なら心配いらねえよ。俺らは自分にできることをやる。そうすりゃパラシアは生き続けるよ。パラシアは俺らが守る、男と男の約束だ。」

バルスは垂れそうになっていた涙を拭った。

「ああ、約束だ。」

2人からは笑顔がこぼれた。

「夜明けだ。」

「行くぞバルス、今日の今頃はみんな笑顔だ。」

「ああ・・・」



## 14 男と男の約束（後書き）

遂にアクセス数700突破！

見て下さってる皆さん評価もよければお願いします

4人はジョリック団を倒すため攻める。ロストは兵士に命令した。  
「みんなは俺らの出た後から攻めてくれ、俺らはできるだけ敵を倒しながら攻めていく。」

「はい。」

「よし行くか。」

「待て待て。」

バルスが止めた。

「お前ら相手がどこにいますとかわかんのか。」

「いや。」

「はーまったく、相手は王宮から北西にあるオリバスという街を潰して拠点にしている。オリバスには30人の上級兵士がいる。そして幹部が……。街の周りには約170人の下級兵士が守りを固めている。今まで何隊かを送り込んだがオリバスにたどり着いた隊はない。」

「完全防御ってこと。」

クロードが自慢げに言った。

「知ってるか、完全防御ってどこか1箇所が崩れるとそこからすべて崩れてくんだってさ。」

「OK・俺らはバラバラに別れて4箇所崩す。後は兵士を信じよう。」

「よし。」

4人は肩を組んだ。

「ジョリックだかガーリックだか知らねえけど俺らは勝つ。」

4人は散った。

ロストは兵士に会った。

「行かしてもらっぜ。」

クロードも兵士に会っていた。クロードの右のほうで火柱が上がっている。

「やってるな。俺もやるか。」

遠くで見ていた兵士がつぶやいた。

「もう数えるほどしか残っていないぞ。」

16 タッグバトル

20分ぐらいで敵の下級兵は全滅した。しかし4人はそのことに気がつかずにオリバスに入っていた。オリバスの中には上級兵士が全員倒れていた。それを最初に見たりサは驚いた。

「えっ、何これ！何で倒れてるの？」

そかの3人も驚いていた。リサが走っているとバルスと会った。

「この理由わかる？」

「いや、もしかしたら俺らが来る前に誰かがやっつけちゃったのかもしれないねえ。」

「誰って誰？」

「他の魔導師とか、魔導政とか。」

「あんた達がこれやったの？」

2人組みが近づいてくる。

「誰？」

「ジョリック団の幹部、レミカと」

「セロリだ。」

「てめえらが。」

「冷静になつて、バルス。」

「悪い、取り乱した。」

「殺す・・・」

レミカが突っ込んできた。リサはレミカに両手を出した。

「修行中に気づいた。私の能力に。」

レミカは倒れた。

「何をしたんだ。」

「リサが今レミカにやった技は幻術だ。リサは極まれに現れる、幻想種だ。」

バルスはセロリの懐に入った。

「俺がこの修行で得たものは闘争心だ。」

「鉄槌」で地面から鉄の棒が出てきた。セロリは鉄の棒に押し出されて吹き飛んだ。

その頃クロードは相手のいる塔にたどり着いていた。中に入ると上級兵士と幹部1人が倒れている。

「何があつた？」

「魔導師が……」

クロードは階段を駆け上がった。最上階には男が1人立っていた。

「お前がジヨリック団のリーダーか？」

男は振り返って笑った。

「俺か、俺は……」

ロストは最上階にたどり着いた。最上階にはクロードが倒れてい  
た。

「クロード、てめえがやったのか？」

腰に刀をさした男は振り返った。

「いかにも。」

「てめえがジヨリック団のリーダー！」

「この男と同じことを言うんだな、俺はキラだ。ジヨリック団の  
リーダーは先ほど倒した。」

「何だと！てめえは一体？」

「男なら戦いで語ろうじゃないか。」

キラは刀を抜いた。仲間を傷つけられたロストは怒っていた。「  
火拳」でキラに殴りかかった。しかし、キラは軽くかわした。「炎  
火放射」で口から火を出した。キラはこれも難無く避けた。「火竜」  
で火竜がキラを襲う。

「戦いは感情任せでは勝てない・・・」

キラは刀で火竜を斬った。火竜は打ち消された。クロードが目を  
覚ました。クロードはつぶやいた。

「やめろロスト、そいつには勝てない・・・」

しかしロストには聞こえない。キラはロストに言った。

「その技は奴と同じだな。」

「奴？」

「レインだ。」

「何だお前、親父を知ってんのか！」

「ほう、レインの子供か！昔戦ったことがある。レインとお前の  
技は似ている、だがお前の技には中身がないレインの技には似ても  
似つかない。」

ロストは冷静を取り戻した。

「悪いな、ここからは俺の持つてるもの全てをお前にぶつける。」  
「おもしろい、歓迎するぞ。」

「火槍」でキラに火の槍が向かっていく。キラは刀で打ち消した。  
「やっばこれじゃなきゃだめか。」

ロストのかかとから火が溢れてきた。「ロツク解除・火進艇魔」

「何だそれは？」

「かかとの火をエンジンとしてスピードを飛躍的に上げた、ついて来れるか？」

一瞬でキラの後ろに回って「火拳」でキラを殴った。しかしうまくかわされた。しかしロストはキラの正面に現れて「火砲」で大きな火の塊を手から放った。火砲は刀で打ち消された。だが、ロストはすかさずキラに突っ込んだ。「紅蓮弾」で手を前に突き出した。これも避けられた。かかとから出ていた火が出なくなった。

「ちっ、時間切れか。」

「最後は見事な一撃だったぞ。」

キラのマントの端が破れた。

「それだけか・・・まっつぎが最後だ。これで決める。」

「俺も向かおう。」

ロストは両手を前に出した。「炎龍」で火竜の5倍はある龍が現れた。

「いい技だ。」

炎龍はキラに襲い掛かる。「風真剣斬」でキラが炎龍とロストを通り過ぎた。炎龍は真つ二つになった。

「俺の負け・・・」

ロストの体から血が噴きだした。

「お前は強くなる、生きる価値がある。ここでは生かしておく。その代わり俺に殺されるまでは決して死ぬなよ。」

ロストの意識はなくなつた・・・

ロストは目が覚めた。屋根が上にある。ロストは王宮に運ばれたんだ。

「目が覚めた？」

リサが覗き込んだ。

「ああ、キラは？」

「私達が行った時にはもう……。クロードに聞いたよ。」

「ああ、とんでもなく強かった。歯が立たなかった。」

「おお、目が覚めたのか！」

バルスが部屋に入ってきた。

「まずは国を救ってくれてありがとう。」

「リーダーを倒したのは俺じゃねえ……。キラだ。」

「だが、お前達がいなきゃこの国はなくなっていた。」

「慰めはよせ。」

「すまん。キラとかいう奴に仕返しするの？」

「当たり前えだ。男がやられたまんまで引き下がれるか。」

「そうか、なら俺を連れて行け。」

「は？」

「王から許可をもらってきた。お前達には感謝をしても仕切れない。一緒に旅してもこの恩を返せるかわからないが、居ないよりはいたほうがいいだろ。」

「お前はそれでいいのか。」

「ああ。」

「わかった。一緒に行こう。」

「やったね。」

リサも喜んだ。クロードが入ってきた。

「待てよ、バルス……。俺ともう一回勝負しろ。」

「いいが、容赦しんど。」



2人は表に出た。

「ねえ、2人ともやめようよ。」

リサが止めようとした。しかし、ロストがリサを止めた。

「男の決闘だ。手出すな。」

「バルス、倒すぜ。」

2人の決闘は始まった。

2人の決闘の行方は引き分けに終わった。クロードはくやしがつていたが前よりすつきりした顔をしていた。

それから何日か経ってドラゴンはパラシアを出ることになった。

「王、今までお世話になりました。」

「うむ、これからはロスト達のために全力を尽くしてくれ。」

「はい。」

4人は王宮を出た。リサがバルスに言った。

「なんか冷たいね。兵士長が国を出て行くっていうのに・・・」

「いや、俺がわがままを言ったんだ。みんな呆れてるんだよ。」

バルスは下を向きながら歩き出した。もう城があんなに遠くに見える。ロストが立ち止まった。

「バルスはパラシアの英雄だよ。ほら、耳澄ましてみよ。」

「行かないでくれー、兵士長。」

「憧れだったのに魔導師なんて。」

兵士達が騒いでいる。

「きつと聞こえないと思ってるんだよ。」

バルスの目から涙が落ちた。

「バカやろう共が丸聞こえだ。」

「きつと別れが辛くて話せなかったんだよ。」

「不器用な奴らだから昔から・・・」

バルスは涙を拭った。

「俺がいない間、国を頼むぜ。」

そんな中、今回派手な動きをしたドラゴンに魔導政が動き出していた。魔導政の本部に大佐クラスが集められた。そして、魔導政ト

ツプの元帥が出てきた。

「遠い所から来た者も近くから来た者もご苦労。今回は最近結成したばかりで信じられないスピードで駆け上がってきているドラゴンという魔導団のことについてだ。ドラゴンは今は4人組でリーダーのロストという小僧はハリネズミのシド、550万ゴールドとジヨリック団を壊滅させたらしい。」

「ジヨリック団って・・・」

「俺が受け持ってた件だったけど少し用事で目を離したら手下は全滅させられていた。」

座っていた大佐の1人が言った。元帥はその大佐に言った。

「ならばこの件、貴様が受け持つか？トウガ大佐・・・」

「別にいいが、殺しちまうぜ。」

会議室の扉が開いた。

「トウガのボウヤにやらしたらほんとに死んじまうぜ、キサラ元帥。」

「ヤクサか、いいだろ手っ取り早いし。」

ヤクサは魔導政の中将だ。

「じゃあ、俺が始末するでいいんだな、元帥殿？」

「ああ、任せよう。」

4人は次の街を目指して歩いてきた。すると急に地震が起こった。リサがみんなに言った。

「みんな、地面の下になんかいるよ。」

地割れが起こった。そして地面からドウガが出てきた。

「見つけたぞ、ドラゴン。」

「なんだてめえは？」

「俺か、俺は魔導政大佐、ドウガだ。」

「ちつ、ついに大佐クラスが動き出したか。4人で一気にたたみ掛けるぞ。」

「あわてるんじゃないよ。」

「土天」でロスト達の足元から大きくて鋭い岩が出てきた。みんなはばらばらにさせられた。

クロードがドウガに聞いた。

「てめえ1人か？」

「他に誰がいるってんだ？」

「なめられたもんだな。」

「起転」でクロードの手には雷が集まった。その手をトウガに突き出した。「洞岩」でドウガの前に大きな岩の壁ができて、起転を防いだ。

「なめてねえよ、なめてたら俺は来ねえ……」

ロストがクロードに慌てていった。

「クロード、そいつから離れる。」

しかしもう遅かった。「土拳」でドウガの手が岩の包まれた。その手でクロードを殴った。クロードは吹き飛んだ。

「バルスは俺と一緒に奴を倒すぞ。リサはクロードを治してやれ。」

「わかった。」

ロストが全員に言った。  
「じいじは強いぞ。」

ロストとバルスはドウガに向かっていく。ドウガは2人が向かってきているのにその場から動こうとしない。

「俺らをあなどんなよ。」

「鉄球」で鉄の玉をドウガに鉄がぶつかる。ロストが「紅蓮弾」でドウガの腹を突いた。

「バルス、ドウガは顔に出していないだけでこれだけの大技を食らって効いてないわけない。」

「わかつてるよ。」

今度は「鉄槌」と「火竜」をドウガにぶつけた。ドウガは笑った。「なにがおかしい？」

「お前らのやっつてることは魔力の無駄遣いだ。」  
ドウガの肌が崩れだした。

「なんだ！」

「俺は今まで岩の鎧を覆ってたんだ。お前らががんばって攻撃してもダメージは0だ。そして終わりにしよう。」

「土露団子」でとても大きな土の塊を投げた。ロストとバルスだけでなくリサとクロードも吹き飛んだ。

「あつけない。」

ドウガは1番近くにいたりサにとどめを刺そうとした。しかし、がれきの中から「火炮」が飛んできた。ドウガは手を引つ込めた。

「まだ意識があるのか。タフな奴だ。」

「俺の仲間はやらねえ、獲るなら俺の首をとってけ。」

「口は達者だな。」

「土拳」でロストを殴った。ロストも「火拳」でドウガを殴った。2人の拳はぶつかり合った。そして、ロストが力負けして吹き飛んだ。

「結局、守れねえか。」

またリサにとどめを刺そうとした。

「待てっつてんだろ。」

「!!!」

「言ったる仲間はやらねえって。」

「お望みならお前を1番最初に殺してやるよ。」

「土星弾」で前が見えなくなるくらいのとてつもなく大きな岩がロストを襲う。ロストは「炎龍」で対抗するが歯が立たない。ロストは吹き飛ばされた。ロストの意識はもうろうとしている。もう、指1つ動かす事ができない状況だ。だが、横にいるリサをよけてドウガはロストの前に来た。

「恨むなよ、お前が望んだことだ。」

「土拳」で腕が岩に包まれた。ドウガは腕を振り上げた。するとドウガの岩が砕けた。

「なんだ!」

ドウガの裏にマストが立っている。マストの足元にはボロボロの3人がいる。

「弟が世話になつたな、ドウガ大佐・・・」

「お前はハイロート団の粉碎のマスト！」

「ロスト、俺がたまたま通りかけなきゃ死んでたぞ。」

「すまねえ。」

「まあ、今のお前のレベルでドウガ大佐と戦えって言うほうがおかしいけどな。」

ドウガがマストに聞いた。

「おい、マスト。その小僧がお前の弟だったのは本当か？」

「そうだ。だから弟はやらねえ！」

「お前が相手なら容赦はしねえ。」

「土露団子」で岩を投げた。マストは手を前に出した。すると、岩は消えてなくなった。

「それがうわさに聞くお前の能力か！」

「そうだ。俺の能力は分子だ。分子を操ることができる。」

「化け物じみた技だな。」

「土角」で地面から鋭い岩が地面から出てきた。「核分離」で岩の分子を分解した。「分体」で分子を集めて大きくしてドウガにぶつけた。ドウガは吹き飛んだ。地面からヤクサが出てきた。

「てめえ。」

「おい、ドウガのボウヤ。マストが出てきたんなら引きな。」

「わかったよ。」

こうして2人は消えた。



リサの目が覚めた。

「ここは？」

マストが答えた。

「宿舎だ。4日間も寝てたんだぞ。まあ、お前が最初に起きたんだがな。」

「すみません。後の3人を治しますね。」

「治せるのか？」

「はい。」

「そうか、じゃあ頼む。」

リサは3人を20分で治した。

「やっと起きたか。」

「兄貴、ドウガは？」

「逃げてったよ。親父に勝つ奴が大佐レベルに負けるとは情けないな。」

「くっ・・・」

「親父はギアンティスの後半に突入した。」

「もう、そんな所に！」

「ああ、だがギアンティスの後半、通称デッドロードには世界最強のあいつがいる。」

「センガクト団、神の子シン・レガウトか・・・」

「そう、最もWORLD ENDに近い男だ。親父と同じ魔導刃の1人。」

「誰だろうと倒す。」

「ドウガに負けたのにか？」

「次は勝つ！」

そのころ、センガクト団の本部にレインが来ていた。レインは腰に刀を差していてシンは背中に大きな剣を持っている。

「久しいな、レイン。」

「2年前だったな。俺らが戦ったのは。」

「あの頃はWORLD ENDにまつしぐらだったからな。」

「いかねえのか？今のあんたの力なら難しくないだろう。」

「WORLD ENDなどもう興味がねえ。まあ、これを言うとみんなが怒るけどな。お前こそいいのか？」

「俺は子供達を待つ。」

「ほう、まだ若いんだろ、当分先じゃねえのか。」

「俺の子供だ。すぐ来るさ。」

「ひっひっひ、そうか。そうだ、お前に紹介してえのがいるんだ。来い。」

シンの奥の扉から男が出てきた。

「第1隊の隊長やつてもらってる、セフトだ。」

「話は聞いてるぜ炎轟。あんたも頭と腕を並べるくらい強いんだろ。」

「お前の話も聞いてるぜ、鳳凰セフト。だがシンには勝てねえよ。」

「1度手合わせしてみたいね。」

「やめとけ、セフト、お前じゃ傷1つつけられねえよ。で、こんな世間話をするためにお前を呼んだんじゃねえ。例のあいつが動き出した。」

「頭、俺外そうか？」

「いや、1番隊長としてお前にも聞いてもらおう。もしあいつが事件を起こしたら俺が命を掛けて止める。あいつとやったら同士討ちか俺が負ける。」

「頭がそんなこと！」

「セフト、実はな」

24 懸賞金

魔導政本部・・・

ドウガとキサラが話している。

「お前が行きながら始末できなかったのか！」

「すまない。」

「どんな形であろうとドウガを凌いだか。写真はるか？」

「ああ。」

「こいつを世界に指名手配する。」

ドラゴンはマストと別れて再び次の街に向かっていた。

「みんな悪い、俺はまだみんなを守れない。」

3人は顔を合わせて笑った。

「もー、何、気にしてんの？」

「リーダーとしての責任感・・・」

「そんなこと考えんなよ。」

「クロードの言うとおりだ。」

「ありがとう。」

空から紙が落ちてきた。

「何なのこの紙？」

紙にはロストの顔が載っている。

「これって！」

「俺の！」

クロードが小さな声で言った。

「炎龍のロスト、懸賞金2500万ゴールド。」

「はっはっはっはっは。やったぜ、お尋ね者だ。」

「今回の一件で・・・」

クロードが悔しがっている。

「なぜ俺の手配書は出ない。」

「ドンマイ。」

「うるせえよ。」

ロストが言った。

「これでもう、後戻りはできねえ。」

「後戻りなんて最初からしないでしょ。」

「まあな。」

25 魔導師の街の恐怖

「ここが次の街・・・」

中には柄の悪い奴らがたくさんいる。

真ん中の酒場・・・

「兄ちゃん、ガン飛ばしてんじゃねえよ。」

ひげボウボウの男が若い男に絡んでいる。

「あんたは？」

ひげ親父は若い男をいすごと押しつぶした。

「あなたはどなたですかだるうが。」

若い男は立ち上がった。

「覚悟はいいな、ひげ。」

それから何分かした。

「おいおい、こいつどうしたんだよ？」

「影縫いのイクトに手出してやられたんだとよ。」

酒場の壁にひげ親父が吊るしてある。ただ、その首はなかった。

ドラゴンは街の中に入っていった。

「なんか気味悪いね。」

「リサは俺らから離れるなよ。」

隣の建物が爆発した。

「なんだ！」

中から男が出てきた。

「ザコばっかやな。」

ロストが聞いた？

「お前がやったのか？」

「そうやで、スリルあって楽しいやろ。」

「名は？」

「ガスト。」

「おい、何油売ってやがる。」

「イクトさくん。」

「またやったのか？」

「スリルや。」

「フン、まあいい。戻るぞ。」

イクトはロストのことをチラッと見た。

「あいつは何だ？」

「知らんで。」

「そうか。」

2人行ってしまった。

「おもしれえ奴がうろついてやがる。特に今のイクトって奴の魔力は半端ねえ。」

「レベルUPのチャンスだな。」

「まっただくだ。」

それからドラゴンはロストとバルス、クロードとリサに別れた。クロード達は大通りを歩いてきた。前から新聞に良く載っているケンズイ団が歩いてくる。リーダーに手下が言った。

「影縫いのイクトがここにいますぜ。」

「そうか。一度会ってみるか。」

「俺になんか用か？」

ケンズイ団の中にイクトが紛れ込んでいる。

「てめえ、いつの間に！」

イクトは大きくジャンプしてクロードの前に立った。

「またあんた達か。どいてな・・・」

ケンズイ団が一斉にイクトを襲った。イクトは手を地面につけた。「影茎」で地面から影の茎が出てきてケンズイ団を締め付けた。ケンズイ団の手下は動けなくなった。ケンズイ団のリーダーがイクトに向かって走りだした。「影突貫」鋭い影が突き抜けた。相手は倒れた。

「何なのこの強さ！」

「俺が倒す。」

クロードがイクトに言った。

「俺と勝負しろ！」

「俺の力見てもやるってか。」

「俺はもつと強くなんなきゃいけねえ。」

「まあいい、相手してやるよ。俺はエサイト団のボス、イクトだ！」

「俺はドラゴン団のクロードだ。」

「雷鳥」で雷鳥がイクトに向かっていった。「影茎」で影の茎が雷鳥を打ちつけた。「雷網」で雷の網がイクトに降ってくる。「影刀侍」で大きな影の刀が網を斬った。網は散らばった。

「何だこりゃ！」

「雷網の能力だ。攻撃されると散らばって攻撃する。」  
イクトは顔を斬った。

「いい感じじゃねえか。今までの奴より強いな……」

「影世界」で周りの建物、木、地面に影が覆った。

「何をした！」

「俺の攻撃範囲を広げた。今、影のある場所は俺のテリトリーだ。俺はこの場所からも攻撃できる。」

「やっぱ、一筋縄じゃいかねえか……」

「影茎」をするとクロードの周りから大量の茎が出てきた。茎はクロードを何回も討ち付けた。クロードは「電線」で空に雷を伸ばした。

「切り札だ。」

「落雷」で空から雷が落ちてきた。

「やべー！」

イクトに落雷が直撃した。

その頃、街に魔導政が来ていた。

「ここが魔導団のたまり場か。攻め落とすぞ！」

200人近くの魔導政が一気に町に攻めて行った。近くの小屋の屋根にマントを覆った男が立っている。魔導政の1人が聞いた。

「お前も魔導師か？」

「そうだが。」

「倒すぞ！」

「やるのかこの俺と？」

少将が部下を止めようとした。

「やめろ、そいつは！」

マントの男は魔導政を見た。すると、魔導政は全員倒れた。少将



が言った。

「こんな大物がなゼイルー又に！」

少将も倒れた。

「風向きが変わった。革命時代の始まりが来る。」

ロスト達は落雷を見てクロード達が戦っているの察してクロードのいる方向に向かっていた。落雷を受けたイクトはピンピンしている。

「俺の落雷を食らって無傷だと！」

「まだまだ。」

「大丈夫か？2人とも・・・」

ロスト達が合流した。

「てめえはあん時の！」

「炎龍のロスト、2500万ゴールド。」

「丁寧調べてくれてんじゃねえか。」

「俺は影縫いのイクト、5000万ゴールド。」

「5000万だと！」

「お前の2倍だ。」

「関係ねえな。敵は倒す。悪いがこいつは貰うぜクロード。」

「かまわねえが、こいつはとんでもねえぞ。」

「わかってる。」

「火拳」でイクトに殴りかかった。イクトは交わしてロストの腹を殴った。ロストは吹き飛んだ。今度はイクトが「影分身」で影でできたイクトとがロストに向かって走り出した。「火炮」が分身に当たって分身は消えた。

「いくぜ！」

「火竜」で地面から竜が出てきた。イクトは竜に潰されそうになった。しかし、竜が消えた。

「何だ！イクト、てめえがやったのか？」

「わかんねえのか？あそこからする魔力が・・・」  
空にマントの男が浮いている。

イクトが「影突貫」でマントの男を刺そうとした。しかし影はマ

ントの男に近づくと消えてしまった。

「何しやがった？」

「ここから時代の流れが見える……」

「わけわかんねえこと抜かすな！」

ロストが「紅蓮弾」でマントの男の所に飛んでいった。マントの男はロストの腕を取って投げた。

「お前ら2人は特別な力を持っている。これから開花するであろう力だ。その力が開花するときお前らはこの世界の革命児となる。」

マントの男は魔力を解放した。そこにいたイクトとドラゴンは地面に押しつぶされた。ロストとイクト以外は意識がなくなってしまった。イクトが聞いた。

「お前は一体何者だ？」

「青い眼光……」

「青い眼光だと！」

「知ってんのか？」

「昔聞いたことがある、神話でな……」

「神話だと！そんなあったかなかったかわからないこと信じれるか。」

「神話は事実に基づいてつづられている……」

「お前は何万年も前の生きてたつてののか！」

「それは自分で見つけるから価値のあるものだ。俺がお前らの力を少し引き出してやる。」

ロストとイクトは宙に浮いた。マントの男の前で止まり2人の額を触った。それから2人の意識もなくなった。

「残る革命児は5人。俺の野望もあと少し……」

## 28 天界と地界へ隠された過去へ

イクトとドラゴンは全員同じ夢を見た。

1000万年前・・・

この世界の創造主「神」は天界に「女神」、地界に「魔王」を置いて天界は天界、地界は地界の守り神とした。

500万年前・・・

世界は平和で端から端までわずか30分で行き来することができた。それを可能にするのがドラゴンだ。ドラゴンは人と同じ言葉を話して共存していた。人はドラゴンに乗って移動していた。地上のことを天界と呼んだ。そして、地上から100万キロ下にもまた人が住んでいた。ここを地界と呼んだ。地界にもドラゴンが生息して地界の人々と共存していた。天界の人々を天使と呼び、地界の人々を悪魔と呼んだ。

夢の中にマントの男が出てきた。

「ここまでが神話として伝えられた。魔導政は隠しているがこれにはまだ続きがある。」

魔王は天界を地界の物にしようと天界に戦争を仕掛けた。しかし、天界の力と地界の力は同等で勝負はつかなかった。地界は戦争にドラゴンを使用し始めた。天界もドラゴンを使用し始めた。ドラゴンの力も同等で数え切れないほどいたドラゴンは数え切れるほどしかいなくなった。この戦争で得るものはないと判断した女神は魔王に話をつけにいった。だが魔王は納得せずに女神と魔王は戦いを始め

た。この戦いに女神が負けて天界の戦力は半減した。これを機に地界は全戦力を天界に向けて天界を自分達の物にした。これにより天界は3つに割れた。これがイルーナ、ソルティア、ギアンティスだ。

5人の目が一斉に覚めた。

「今のは！」

空からマントの男の声がした。

「今のが神話の真実だ。魔導政はこのことを隠しているがそのうち俺が世界に報告する。ドラゴンはまだいるってことと一緒にな。」

「ドラゴンが！」

「そう、そして隠された秘密はまだある。お前らがこれからWORLD ENDに向かうのならその謎も解き明かされるだろう。」

「てめえは一体・・・」

「革命児を育てる親。」

マントの男は消えた。

「炎龍、この勝負はとっておこう。これから俺は奴について調べてみる。」

「ああ。」

魔導政本部・・・

「キサラ元帥。」

「どうしたというのだ？そんなにあわてて・・・」

「今、シラヌイ大将から電報が届きました。」

「なんだ？」

電報にはこう書かれていた。

「ついに例のやつが動き出したようだ。何人かの魔導団にはもう情報が伝わっているみたいだ。今、考えられる奴の動きは幽閉されているファントムの開放とシンとの決着かと思う。どちらにしろ何か手を打たねばならない。このことは歴史を知るものだけに伝えたい。ほづが混乱を招かずに才略の手だと思つ。」

キサラの顔が真っ青になった。

「今すぐ残りの大将を呼べ。緊急事態だ！」

「はい、今すぐに。」

ドラゴンはこの頃次なるステップに入っていた。

「ここがイルー又最後の国か・・・」

ドラゴンの前には木でできたボロボロの家が立ち並んでいた。

「なにここ！」

リサが驚いている。

「何驚いてるんだ？」

「ここ、強い魔力がうようよしてる。」

「なんか、変な空気だ。」

街の中を歩き出すとひげが丸かっているおじさんが走ってきた。

「ハアハア、殺される。」

おじさんの裏から男が走ってくる。男は銃でおじさんを撃った。おじさんの心臓を撃ちぬいた。

「お、おい、大丈夫かよ。」  
銃を持った男が近づいてきていった。

「やめておけ。その男を助けるといふことはこの国を敵に回すといふことだぞ。」

「お前らなんでこの人殺したんだ？」

「その男は無断でわが城に入ったからだ。」

「それだけで殺したのか？」

「これがわが国の王が下した結果だ。」

「火拳」で銃を持った男を吹き飛ばした。

「お前らやつちまったな。ここの国の王は魔導刃だ。お前らは死ぬ。」

「その魔導刃に言っとけ、俺が叩き潰してやるってな。」  
男は逃げていった。

「おもしれえじゃねえか。」

残りの3人がロストを睨んだ。

「何でいつもロストは知らない人のために戦うの？私達を巻き込んで・・・」

「うーん、なんとなく・・・」

「なんだそりゃ！」

「まー、とにかくこいつらは敵だな。」

「ふー、今の俺らで勝てるのかよ魔導刃に・・・」

「なるようになるさ。それに俺は街の町であいつが力くれるっていつてから体から力が溢れてる感じがする。」

「俺も。」

「そっぴや俺も。」

「じゃあ、私も。」

「じゃあって何だよ？」

「ガブラス様、また侵入者です。」  
「今度は骨のある奴なんだろうな。」  
「それはわかりませんが、敵です。」  
「ふっ、そうか。じゃあ、マチアス少し相手して来い。」  
「おいらがダスカい？」  
「お前は結構やるからな。殺してきてもいいぞ。」  
「承知したダス。」

ドラゴンは街の料理屋で飯を食っていた。すると、店に男が入ってきた。男はロストが座っているテーブルに近づいてきた。

「あんたらが狙われた魔導団か？」  
「そうだが。」  
「俺も一緒に戦わせてくれないか？」  
クロードが言った。

「お前何言ってるんだ？」  
「1ヶ月前、魔導刃のガブラスはこの国にやってきてこの国の王を倒して王の座を奪った。そして、力で国民をねじ伏せている。俺はもう耐えられないんだ。」

「お前強いのか？」  
店の入り口が吹き飛んだ。マチアスが入ってきた。  
「お前らが侵入者ダスカ？」  
店の中いた人が逃げていく。

「何だこの変な奴は？」  
「ガブラスの部下だよ。こいつ倒せば仲間に入れてくれるか？」  
「別にいい。」

マチアスは突っ込んできた。男は空中で回転してマチアスを蹴っ



た。マチアスは吹き飛んだ。

「自己紹介が遅れたな、俺は欧連のソフトだ。」

ドラゴンとサフトはガブラスがいる城に向かっていった。走っていると城からたくさんさんの槍が飛んでくる。バルスが言った。

「俺1人で充分だ。」

「鉄層」で槍をすべて防いだ。サフトが言った。

「ガブラスの幹部は後3人だ。ガブラスとゲラリとジンゾー。」  
その話にクロードが食いついた。

「ジンゾーがいるのか？」

「ああ、知ってるのか？」

「俺は小さい頃、剣術やっててある1本の刀がほしくて今まで戦いで刀を使わなかったんだ。その刀をジンゾーが持つてるって聞いたことがある。」

「じゃあ、ジンゾーはお前がやれよ。俺はガブラスって奴とやりてえ。」

サフトが答えた。

「ガブラスは1度俺と戦ったが無理だった。奴は凶戦士ガブラス、懸賞金1億6000万ゴールド。」

「やつば聞いたことない額だね。まあ、世界の中で選ばれた1人だからか・・・」

「おもしれえ。そろそろ、そんな奴と戦いてえと思ってたんだ。」

「ゲラリは？」

「俺がやりてえ。」

サフトが言った。

「バルスとリサはそれでいいか？」

「しょうがねえ。」

「えー、私は？」

「じゃあ、俺の代わりにガブラスと戦うか？」

「すいません、冗談です。」  
「俺らはガブラス達を倒してソルティアに行く。いっぞー！」

ロスト、クロード、サフトは城の中に入った。バルスとりサは城の周りの兵士を倒していた。サフトがクロードに教えた。

「ジンゾーは本館と離れた別館にいる。そこを左だ。」  
「わかった。終わり次第そっちに向かう。」

クロードは曲がっていった。クロードは橋を渡って別館に着いた。  
「おかしい、俺らが来るのは分かっているのに兵士が1人もいない。なめられてるな。」

「その通り。」  
天井に刀を持っている男が立っている。

「お前ジンゾーか？」  
「そうだ。」

「その先灯静を俺によこせよ。」  
「これはやらんぞ。」

「お前が持つてるより俺が持つてるほうが有効に使えるんだよ。」  
ジンゾーは他の刀をクロードに投げた。  
「試してやる。参れ。」

### 32 クロードの剣術

クロードはジンゾーが投げた刀を持った。

「刀を投げるな。自分が持つてる刀には魂込めろよ。」

「いかしたこと言ってるじゃねえ。」

ジンゾーがクロードに襲い掛かる。

「俺は刀を投げる奴、相手に本気はださねえ。」

クロードは刀を抜いた。クロードとジンゾーは通り過ぎた。ジンゾーの肩が斬れた。

「お前俺に傷をつけるとは！」

「俺は1回お前と会ったことがある。」

「なんだと！」

「覚えてないか・・・」

「負けた奴の顔なんかいちいち覚えてられるか。」

「負けた？何言ってるやがる。負けたのはお前だ。」

「俺がお前に負けた？ふざけんなよ。」

「剣術世界大会。俺は決勝戦でお前に勝った。」

「剣術世界大会だと！じゃあ、お前はあん時のチビか。」

「そう、当時16歳だったお前は5歳だった俺に一瞬で負けた。」

俺の名はクロードだ。」

「てめえが！フン、でかくなつたな。あの大会で優勝間違いないといわれてた俺を倒したお前を俺はどれだけ憎んだか。」

「俺はあの大会を優勝してその先にいる更なる強者を見た。今の目標はこの先で待つ強い奴らを倒すことだ。お前は眼中にねえ。」

「言ってくれ。」

ジンゾーはクロードに斬りかかる。クロードは「起点」で刀に雷を集めてジンゾーを斬った。ジンゾーは倒れた。

「名刀・先灯静はもらつていくぜ。」

その頃、ロストとサフトはゲラリの前に来ていた。ゲラリは体長3メートル位ある。

「ゲラリ、お前は俺が倒す。」

「バカなこと抜かすな。俺はガブラス様以外には負けない。」

「ロスト行ってくれ。」

「ああ、そうする。」

ロストは階段を上がっていった。

### 33 もう戻れない

サフトはゲラリに攻撃した。ゲラリはサフトの足を持って投げた。サフトは壁にぶつかった。そして、壁が崩れてきた。サフトはがれきの下敷きになった。

「死んだのか？」

サフトは回転してがれきを吹き飛ばした。そして、ゲラリの方を見た。すると、ゲラリに剣が刺さっている。ゲラリの体は大きくて誰が刺しているのが見えない。

「だ、だれだ！」

ゲラリが剣から抜かれて巨体のゲラリが吹き飛ばされた。その裏から出てきたのは・・・

「なぜだ、なぜお前がここに！」

サフトは体が固まった。

バルスとリサは周りにいた敵を全員倒して城に向かっていった。

「リサ、あいつらの魔力はどうだ？」

「うん、今のところみんな魔力は感じられる。クロードは敵を倒したみたい。サフトは大きな魔力を持ったと戦ってる。とても強い魔力・・・」

「ロストは？」

「うん、城をどんどん登ってるけどロストの先の魔力が少し変わってる気がする。とにかく、クロードもサフトに向かっていているから、私達もサフトのところに行って合流しましょ。」

「ああ・・・」

最上階にはガブラスじゃない奴が待つていた。ロストが最上階にたどり着いた。

「お前がガブラスか？」

「わしがガブラス？なめた口を利くな。ここに転がっているのがガブラスがなのだよ。」

ふけた男が杖で転んでいる男の頭をつついた。男が口から血を流して倒れている。

「お前がやったのか？」

「わしがやったのだよ。」

ロストは「火拳」で年寄りに殴りかかった。年よりは杖でロストの額を突いた。ロストは吹き飛んだ。

「杖でこんな威力、てめえは！」

「下の階で待つてるよ。」

年寄りは消えた。

「待て！」

ロストは下の階に走り出した。

こうして、サフトのいる階に全員が集まりだした。

ロストとりサ達、クロードは同じタイミングでサフトの所に着いた。そこには2人の男がいた。

「お前達は？」

さつき、ロストの所にいた老人と鎧の男がいる。

「もう来たのか！」

「あんたは一体？」

「わしか？わしは魔導刃の1人ヘズキーラだ。」

「俺はガブラスだ。」

「なんでここにいるんだよ！」

「サフトって奴が会いたがってたから俺から行ってやったんだよ。」

ヘズキーラとガブラスの間にサフトがいる。

「お前ら手出すなよ！こいつらは俺がやる。」

「バカいうんじゃないよ。」

クロードが刀を抜いて走り出そうとしたがロストが止めた。

「クロード、我慢するんだ。」

「なんで？」

「これはサフトの戦いだ。」

サフトがガブラスに殴りかかった。ガブラスは両腰の剣を抜いてサフトのパンチを止めた。そして、ヘズキーラが杖でサフトを殴った。サフトは吹き飛んだ。

「わしらは同盟を組んでこれからシン・レガウントを倒しに行く。」

そこにロストが割り込んで入った。

「聞きずてならねえな！シン・レガウントは俺が倒す。」

「お前のような若造に倒せたら世界は終わりだ。」

「あんたのような年寄りにも倒せたら世界は終わるな。」



「口は達者のようじゃな。」

「ヘズキーラ、そろそろ時間だぜ。」

「そうじゃな、若造よ、もしホントにシンに挑む気があるのなら  
駆け上がって来い。」

「言われなくてもそのつもりだ。」

「そうか。ならば、この街から東にずっと歩いてゆけ、きっと力  
が手に入る。」

ヘズキーラは杖で地面を叩いた。すると、ヘズキーラとガブラス  
が浮いた。

「ガブラス待てよ！」

「お前も強くなつて俺を倒すか？」

「今か勝つんだよ。」

ガブラスは笑って空を飛んでいった。

「ちくしょうが・・・」

「サフト、俺達に着いて来ないか？ そうすればガブラスを倒すこ  
とができる。」

「ああ、そうするよ。それに、約束があるんだ。」

「約束？」

「センガクト団のセフトは俺の双子の兄弟なんだ、そして、喧嘩  
の決着をつけるって約束したんだ。」

「シンのとこの1番隊長じゃねえか！」

「まー、どうでもいいけど行こうぜ。」

「ああ、この国ももう解放したしな。」

「ヘズキーラの言ったこと、信じるのか？」

「行ってみれば分かるさ。」

### 35 オブライトの力

センガクト団の本拠地・・・

「東のテリージョが監獄行きだつてよ。」

「ここ最近になって政府がやけに慌てだしたな。」

「一番隊長と部下がしゃべっている。シンが2人に近づいてきた。」

「セフト分かるか？」

「なにが？」

「今この世界は荒れ始めてる。この世界は今何か重大なことを目の前にしている。かつてない大きなことだ。もう、動き始めてるんだ。政府もこれに気づき始めたんだろう。」

「例のことに関係が・・・」

「わからねえが覚悟はしといた方が良さそうだな。」

「覚悟は常にしておくべきだと俺は思う。」

セフトの後ろに男が立っている。シンは背中の大剣を一瞬で抜いてその男を斬った。しかし男は軽々と避けた。

「頭こいつは？」

「青い眼光オブライトだ。」

「こいつが青い眼光！」

「懐かしいな、シン。俺が眠ってる間にずいぶん強くなったじゃえか。」

「こんな早く俺に会いに来るとはな。」

「決着をつけようと思ってな。」

「セフト、お前達は下がってる。」

「頭・・・」

「早くしろ、こいつ相手にお前らに気を配れねえ。」

「わかった。」

「オブライト、お前の目的は何だ。」

「まずは戦いたい。」

オブライトはシンの前に一瞬で現れてシンを殴った。シンは大剣でガードした。

「そうだな、まずは拳で語るとするか。」

シンは大剣をオブライトに当てた。オブライトは体から魔力を出して防いだ。

「うそだろ、頭の大剣を魔力で・・・」

「お前の弱点はここだ！」

オブライトはパンチを連発した。煙が引いた、中にいたシンは無傷だ。

「オブライト、お前じゃ俺に傷1つつけられねえよ。」

「何を根拠に？」

「俺の魔法は絶対防御、お前じゃどうにもできねえ。」

「まだ技1つ使ってないのによく吠える。」

「やってみるか？」

「これが防げたら、俺の未来図を話してやるよ。」

オブライトは宙に浮いた。手を振り上げた。オブライトの手に光が集まりだした。

「まだ、お前にはやられん。」

「大絶壁」でシンの前には大きく厚い岩が現れた。オブライトの手にはとてつもなく大きな光が出来ている。「月光弾」オブライトの手から光が離れて岩に当たる。耳がちぎれそうな位高い音が鳴り響く。そして岩が崩れた。光はシンに直撃した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6377j/>

---

DORAGON

2010年10月21日23時33分発行